筑波大学附属図書館所蔵
湯島聖堂関連美術史料に関する報告書

筑波大学本狩野尚信筆《李白観瀑・剡渓訪戴図》屏風について

渡邉晃

はじめに

本稿において扱う筑波大学本狩野尚信筆《李白観瀑・剡渓訪戴図》屏風は平成一二年（四月二一日）に筑波大学において新出したものである（挿図1、2）。

本稿では、調査資料の法量および画面の状態につい、図版を中心として言及していきたい。

調査史料の現状

・材質形状　紙本水墨　屏風（六曲一双）

・寸法

右隻《李白観瀑図》縦一三六・七、横三二一・二cm

左隻《剡渓訪戴図》縦一三六・八、横三二一・八cm

画面および表具の状況

本図は狩野探幽筆《野外奏楽・猿曳図》、田村直翁筆《架鷹図》とともに発見されたが、いずれの屏風も外装の木箱を失い、箱書きなど一切の記録を欠く（2）。全体的に損傷が激しく、虫食い、剥落、汚れなどが各所に認められる。

《李白観瀑図》の画面を眺めると、左に視線を移すにつれ余白部分の割合が極端に増す。対となる《剡渓訪戴図》は逆に画面右に大きな余白部分が認められることから、二つの屏風は並列することではじめて成り立つ構図を持つことが窺える。尚信の《瀟湘八景図》屏風（六曲一双、紙本墨画、東京国立博物館蔵）にも同じ構図が認められるのをはじめ、探幽、尚信を薫育したことで知られる狩野興以の《山水図》屏風（六曲一双、紙本淡彩、東京国立博物館蔵）にも尚信の作例ほど極端ではないにしろ同様の表現が認められ、この構図がひとつの流れであったことが看て取れる。

本図は「夏景山水図」として捉えることができるが、対となる《剡渓訪戴

図》は「冬景山水図」と考えられ、双方で「夏冬山水図」をなしていることが理解できる。さらに《李白観瀑図》の五、六扇目に太陽、《剡渓訪戴図》の一、二扇目に月が描かれることから、「日月山水図」として括ることも可能である。また《李白観瀑図》の二扇目に松、《剡渓訪戴図》の五扇目に竹、六扇目に梅が描かれ、松竹梅が配されていることがわかる。

画面は各扇ともに縦に三枚の紙継ぎが見られる。一扇目には上中央部分に斜め下方へ向かって伸びる傷が認められる（挿図3）。また下方やや右の松の一部に大きな剥落が二箇所認められる。画面中央部には縦に伸びる虫食いの跡がある。その他細かな剥落が散見される。

一扇目から二扇目へかけて目にとまるのは画面下方に位置する大きな剥落である。一扇目の下方右端を基点とするこの剥落は、二扇目の左端まで伸び、黒く描写される何かの図様とぶつかる。この細長く横に伸びた空間は画面中でも非常に目立ち、二扇目に描かれた図様と共に不可解な印象を与える。間近で眺めると黒い図様がもともとは暗く部分にまで繋がり何かの図様をなしていたようにも見えるが、墨の色の系統が他とは印象を異にし、疑問を覚える。補筆の可能性も考えられるであろう。

一扇目には画面右端に印章が二つ捺されている（挿図9）。上方のものは角が丸みを帯びた正方形の形状であり、中に「狩野」と記されている。下方の印章は、壺の形態をとった狩野は独特の印章であり、『古画備考』には尚信剃髪後の号である自適斎の款記を伴い紹介されている。

二扇目には上方に滝が描かれる。滝は画面中央まで描かれず上方のみで途切れる。この滝の表現には類例があり後述する。滝の下部の空白部分は瀑布のもたらす飛沫や霧を表す様にも見える。下方には画面中央から右半分に松が描写される。松は上部の先端が大きく湾曲し菱形を形作る特殊なものである。

松の左側には書斎が描かれ、中に机と食器類が見える。その前には煮炊きする童子が描かれており、その衣服と団扇は薄く朱で彩色される。東屋は簡略的な表現で描写されており、その屋根の左端に描かれているのは雀であろうか。

その他画面の損傷としては二扇目上部左側には剥落の跡に墨を塗った箇所が認められ、書斎の下方には大きな虫食いの跡が見られる。また一扇目と二扇目の継ぎ目に沿って画面上から下まで細長い剥落が認められるほか、二扇目の左端には画面上から下まで墨を薄く塗り損傷を隠した跡が見られる。

三扇目には下方に流れ落ちる滝と李白と目される高士が描かれている（挿図4）。李白は突き出した岩の台座の上に座し、目を閉じているようにも、下方の滝に視線を投じているようにも見える。李白の顔には、書斎の童子と同じ系統の朱がほんのりと残る。岩の台座は、画面手前に向かって三つのくびれをもつ独特の形状を持つ。また岩の先端からは笹が前方へと勢いよく伸びる。李白はその右手が三扇目と二扇目の間で隠れており、その仔細な形状については判然としない。李白の手が隠れることからも分かるように、二扇目と三扇目との間はいくらか画面が屏風に沿って織り込まれる形になっている。これは本屏風と対になる《剡渓訪戴図》においてより顕著である。

滝は画面右から左へ四扇目にかけて描かれる。この滝の周囲には書斎の付近に見られるものとよく似た点苔の描写が幾つか認められる。三扇目において認められる画面上の損傷としては、画面上部中央やや右から画面下に向かって流れる幾筋かの水の垂れたような跡が挙げられる。これは田村直翁の《架鷹図》など同時期に発見された屏風絵にも見られる特徴であり、外装の箱を失っていることと合わせても、何らかの罹災に起因するものであるかもしれ

ない。その他画面上部には剥落の跡に墨を塗った部分が数箇所認められるほか、二扇目との境界線に沿って細長く縦に伸びた剥落が見られる。

四扇目には、三扇目から続く滝が画面右端に描かれるほかは描かれるもののない空白部分となっている。三扇目と同様、画面中央上部から水が垂れたような跡が幾筋か下方へと延びている。画面上部には比較的大きな不定形の剥落を墨で覆って隠した箇所が幾つか認められる。また四扇目と五扇目の境界には、細かな剥落が画面上部から下部にかけて伸びている上に、うすい墨が大きく塗り重ねられている。これは二扇目と三扇目との間にも見られることであり、本図と対になる《剡渓訪戴図》や、狩野探幽筆の《野外奏楽・猿曳図》にも同様の補修の跡が見られる。屏風絵を折り重ねたときに外側に剥き出しとなるのが二・三扇目、四・五扇目の境界であることから、激しい痛みが生じたのであろう。

五扇目、六扇目には、図様としては山と、太陽が描写されるのみである（挿図5）。先に画面は縦に三枚に継がれていると述べたが、その継ぎの線を眺めると各扇ごとに上下のずれが生じているのに気づく。四扇目と五扇目との間の上下のずれは特に顕著である。これも補修の際に生じたものであろう。画面上部から流れる水の垂れた跡はここでも多く見られ、また画面全体に細かな虫食い、剥落、剥落の上に墨を塗り補修した跡などが数多く見られる。

《剡渓訪戴図》では、一扇目に李白観瀑図の六扇目と対を成す月が描かれ、二扇目には戴安道を訪ねる子猷が配される（挿図6）。《李白観瀑図》と同様に各扇には縦方向に三枚の紙継ぎが認められる。一扇目では画面上部左方に大きな剥落が見られ、薄く墨による補修がなされている。画面中央よりやや下、右端にも大きな剥落がある。三枚継ぎのうち、もっとも下の紙継ぎ部分には横方向あるいは斜めに向かって伸びる傷が幾つか見られる。二扇目では、上部左側に大きな剥落があり、やはり薄く墨で補修された跡がある。また画面中央付近では、上から下にかけて垂直に伸びる傷が確認できる。下方右側に位置する剥落は、子猷の乗る船から伸びる波の図様を途中で打ち消してしまっている。

三扇目から四扇目にかけては、戴安道の家が描写されている。三扇目から四扇目にかけて、四扇目から五扇目にかけては、いずれもモチーフが扇と扇の境界線でずれており、四扇目が他の扇に比べ少し上方にせり上がっていることが看取される（挿図7）。三扇目では、画面上部左側に大きな剥落が認められるほか、画面右端を上から下にかけて伸びる剥落、黒ずみがある。四扇目には画面上部左側に大きな剥落と、隅による補修の跡がみられ、画面下方にも横方向へ帯状に伸びる大きな剥落がある。

五、六扇目には、上方に山、画面左端にはせり出した岩と、岩から生える松などが描かれる。一扇目から四扇目にかけて、いずれ画面上方左端に大きな剥落が見られたが、それは五扇目、六扇目においても共通する（挿図8）。剥落の形状も似通うことから、この屏風絵が各扇ごとに分けて保存された時期があり、全ての扇が重なった状況で何らかの罹災にあってこのような損傷が生じたのではないかと推察される。

五扇目では、画面上部右側に水しみが認められ、画面中央やや上まで広がっている。画面下部中央には幾つかの虫食いの跡も認められる。六扇目には、画面上部右側から下方にかけて、垂直に伸びる水しみが見られる。また、その水しみに対して水平に交わる損傷が認められる。

（付記）

本稿は、平成一四年（二〇〇二）三月発行の『筑波大学附属図書館所蔵　狩

野探幽等江戸前期屏風の研究』（筑波大学芸術学系守屋研究室）に掲載したものに、加筆修正を加え、再録したものである。

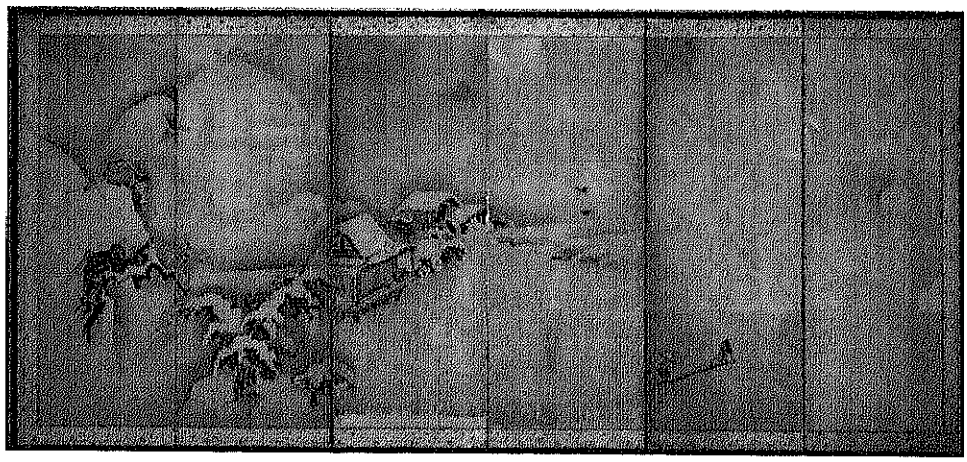
注

（1）『復刻版東洋画題総覧』平成九年　図書刊行会。

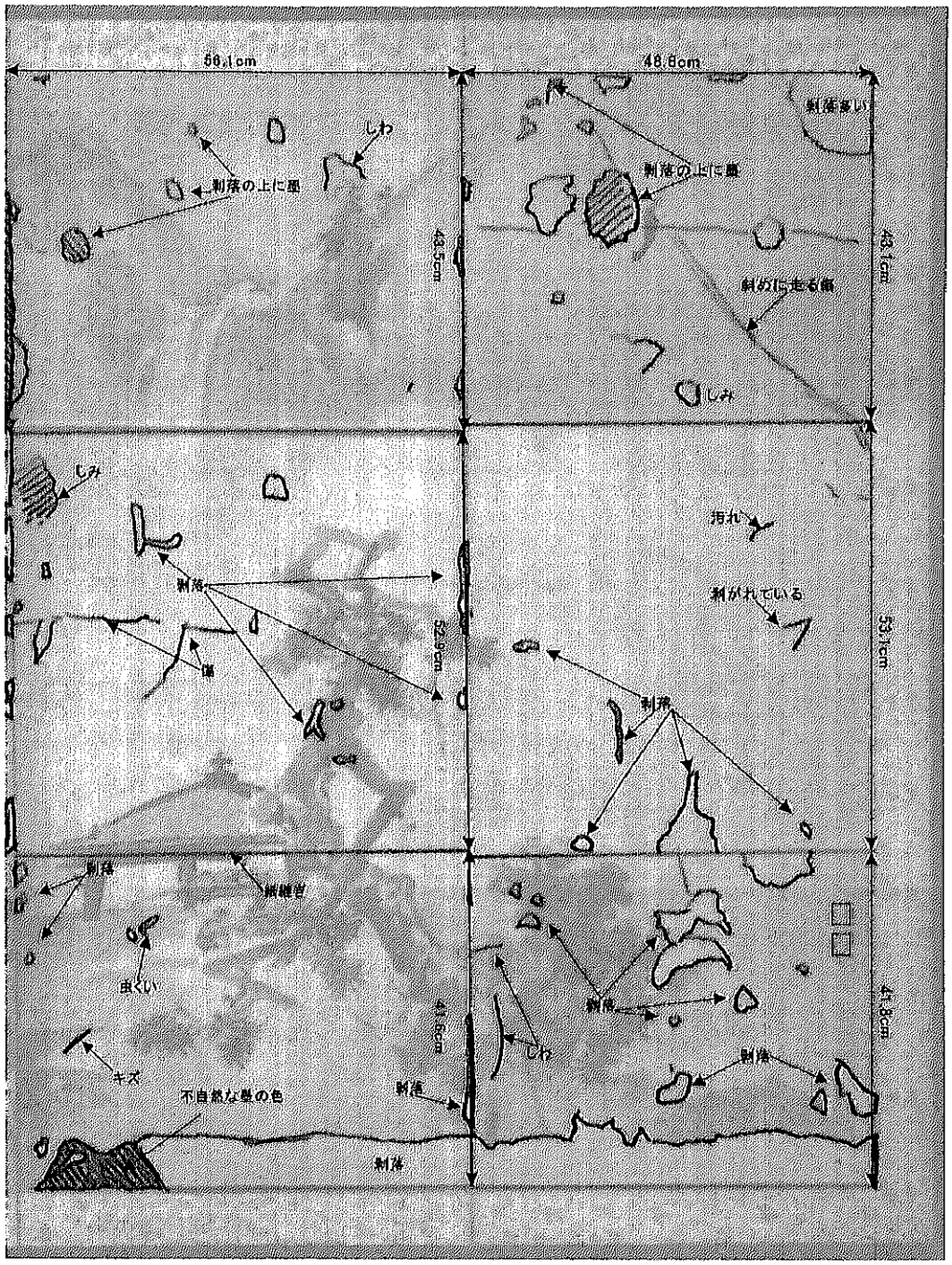
（2）守屋正彦「歴聖大儒像と探幽・尚信の新出屏風について」『筑波大学付属図書館蔵日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風と歴聖大儒像―』筑波大学附属図書館　平成一二年　一七頁参照。

図版

挿図1 《李白観瀑図》（右隻）

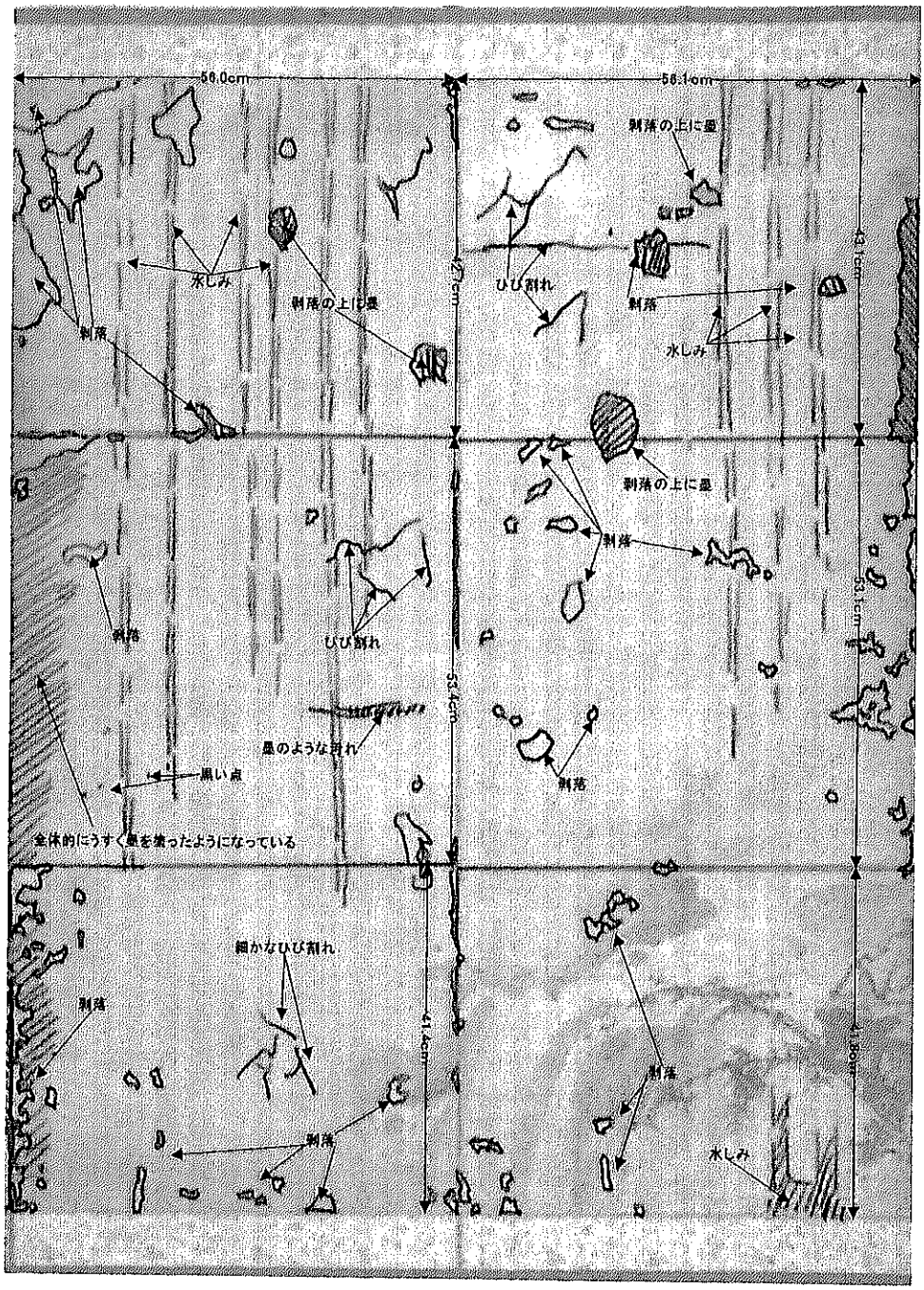


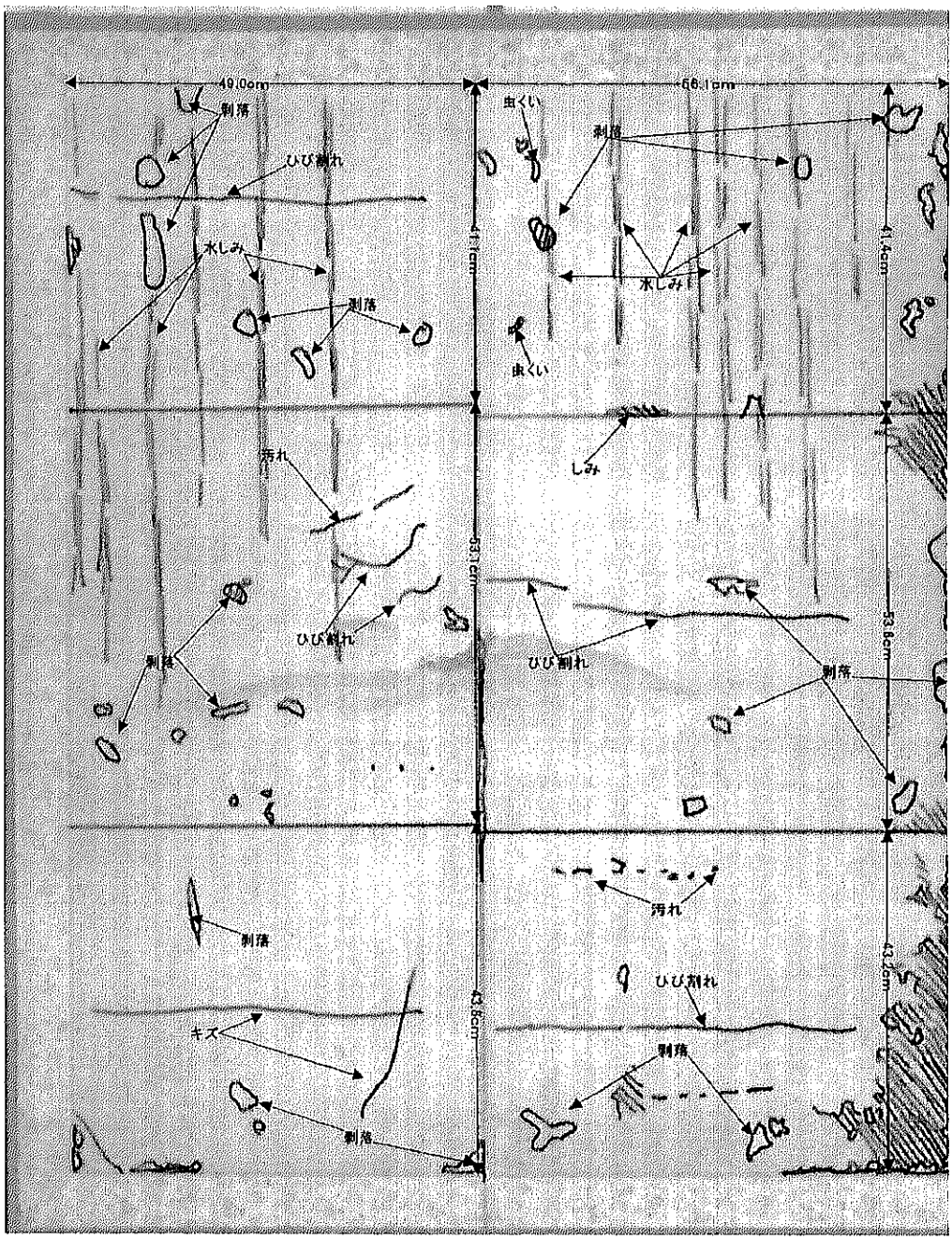
挿図2 《剡渓訪戴図》（左隻）

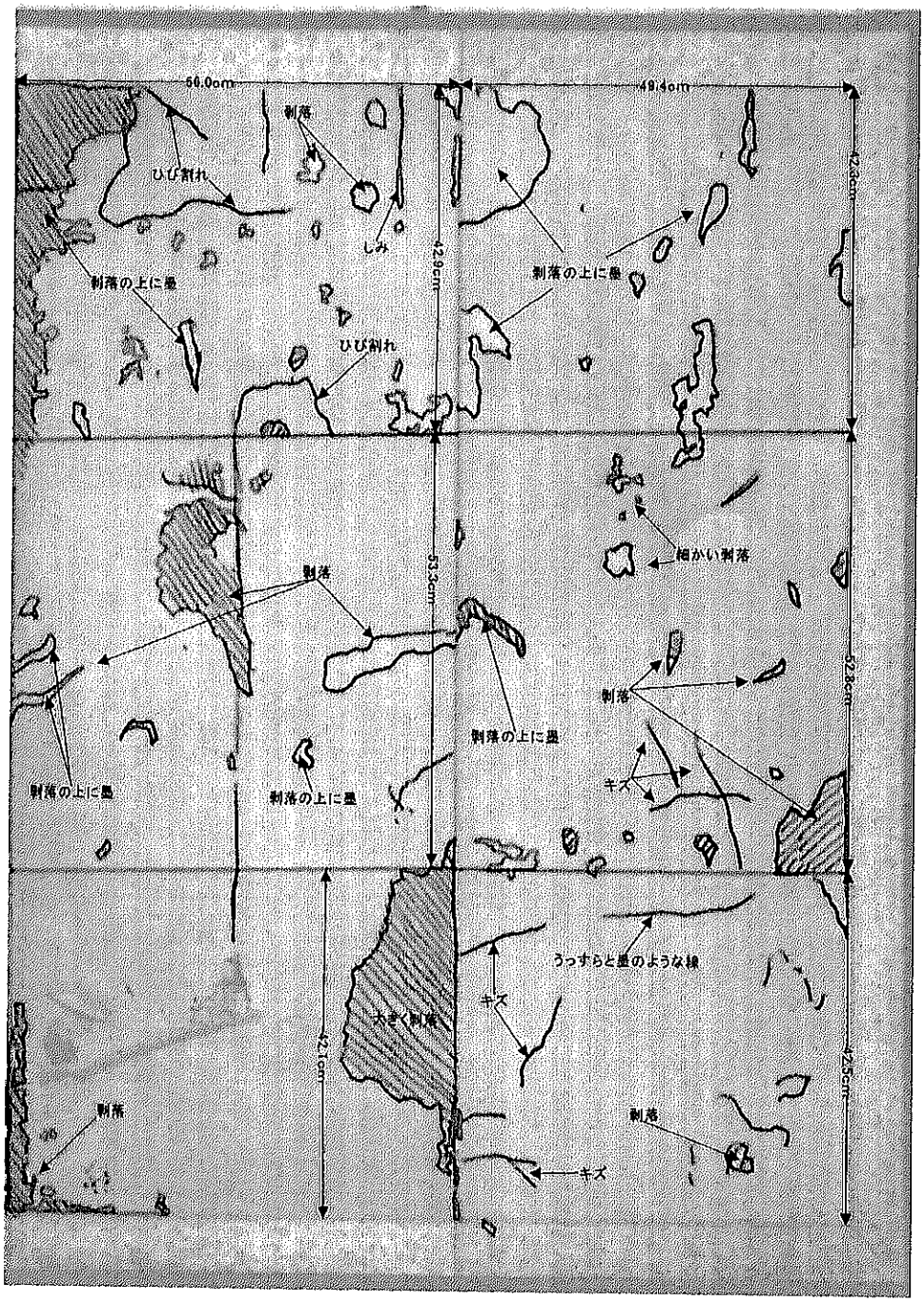


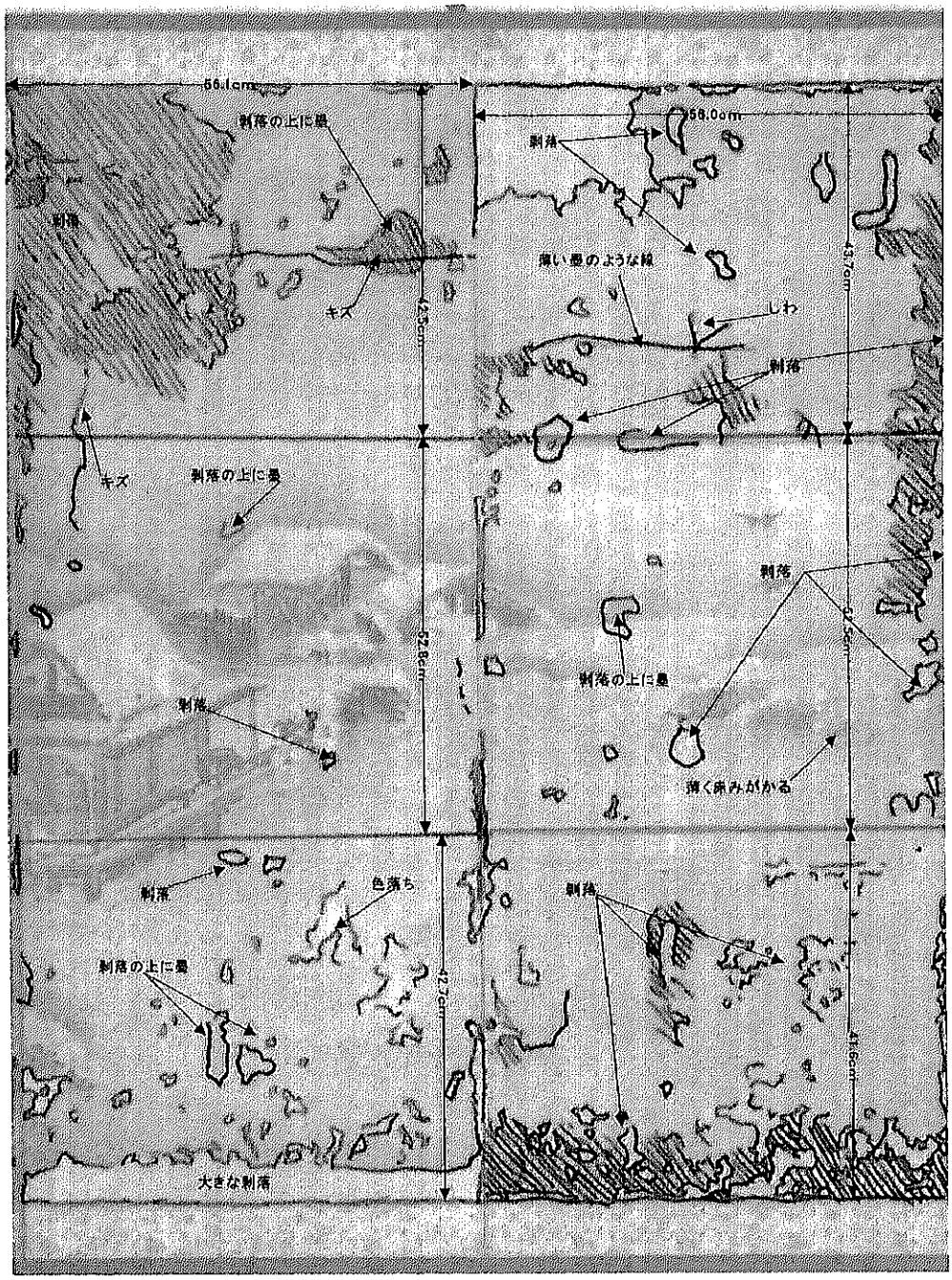
挿図3　《李白観瀑図》　一・二段目

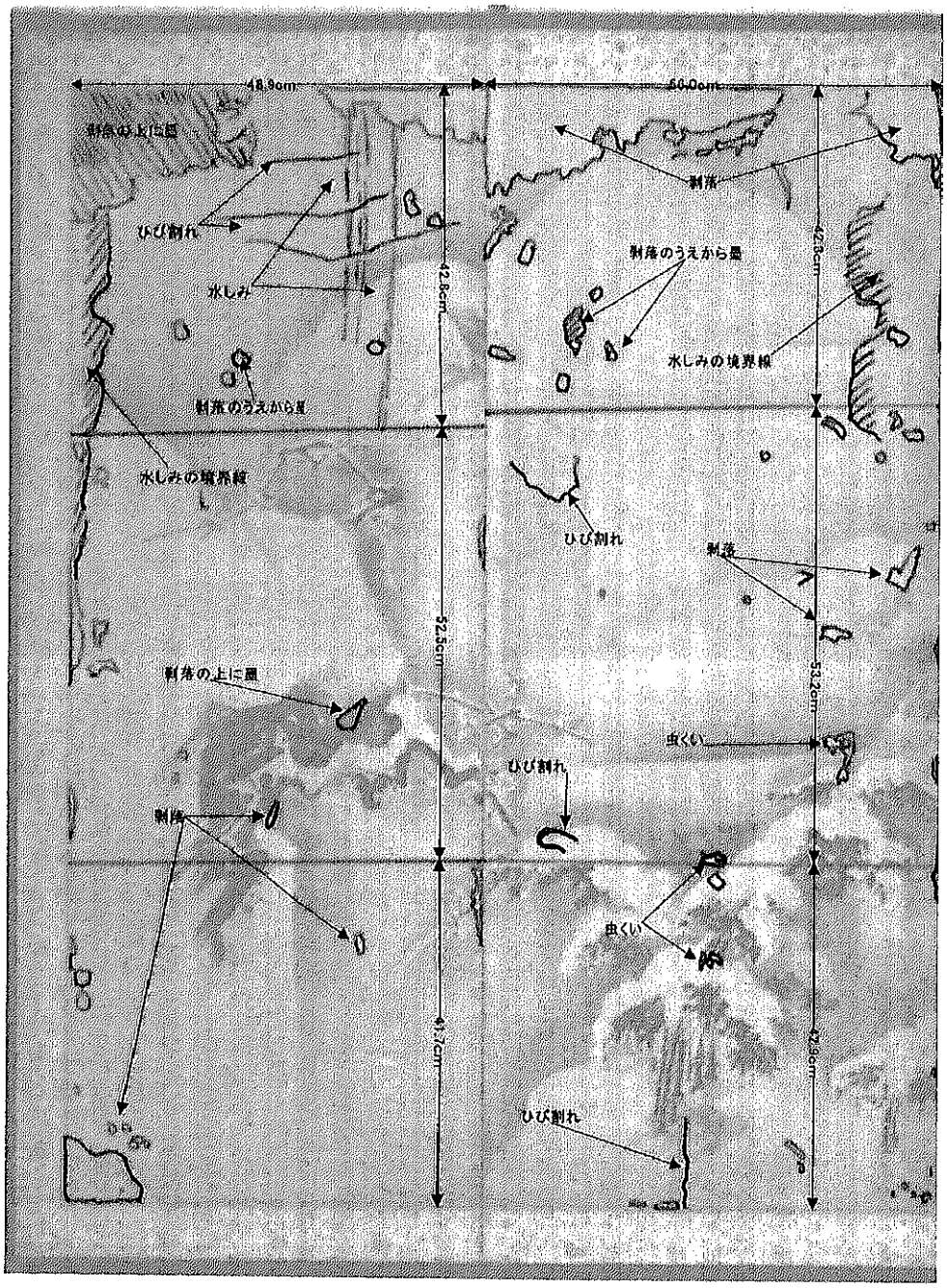
挿図4　《李白観瀑図》　三・四扇目

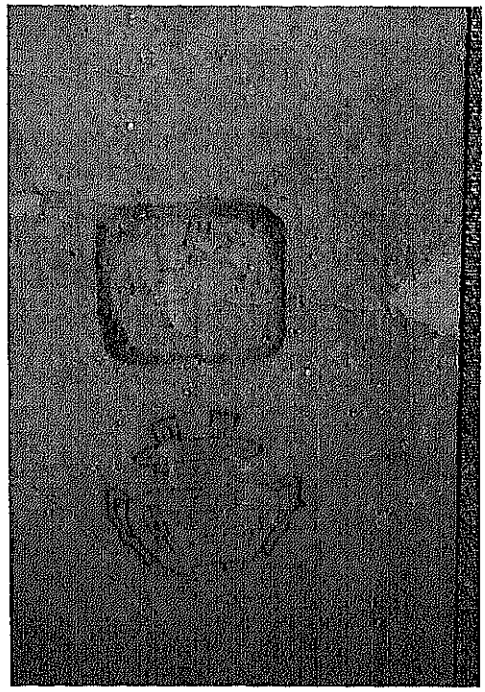



49.0cm
66.1cm
剥落
ひび割れ
水しみ
剥落
汚れ
ひび割れ
剥落
剥落
キズ
剥落
41.1cm
53.1cm
43.8cm
虫くい
剥落
水しみ
虫くい
しみ
ひび割れ
剥落
汚れ
ひび割れ
剥落
41.4cm
53.6cm
43.2cm

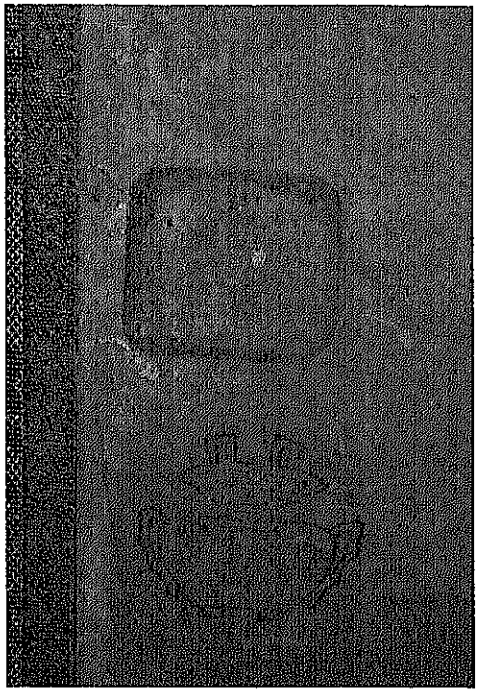

50.0cm
49.4cm
剝落
ひび割れ
しみ
剝落の上に墨
ひび割れ
42.9cm
剝落の上に墨
42.6cm
相かい剝落
剝落
52.3cm
剝落
剝落の上に墨
剝落の上に墨
剝落の上に墨
キズ
52.8cm
うっすらと墨のような線
キズ
大きく剝落
42.1cm
剝落
剝落
キズ
42.5cm


56.1cm
剥落の上に墨
剥落
キズ
42.5cm
キズ
剥落の上に墨
52.8cm
剥落
剥落
色落ち
剥落の上に墨
42.7cm
大きな剥落
56.0cm
剥落
薄い墨のような線
しわ
剥落
43.7cm
剥落
剥落の上に墨
剥落
輝く斜めがかる
42.5cm
剥落
41.6cm


48.9cm
50.0cm
剥落の上に墨
ひび割れ
水しみ
剥落のうえから墨
水しみの境界線
剥落
42.8cm
52.5cm
41.7cm
42.8cm
52.2cm
42.9cm
虫くい



挿図9　《李白観瀑図》　印章（拡大図）



挿図10　《剡渓訪戴図》　印章（拡大図）